
何故か勇者

川岸新兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何故か勇者

【Nコード】

N0733Z

【作者名】

川岸新兎

【あらすじ】

十五年前に出現した魔王。目的は侵略でも殺戮でもなく、移住。魔王が移住の対価として人類に差し出したのは魔法という奇跡の技。少年、瀬川宗也は魔王の下で魔法を学ぼうと魔術高校の入試に挑戦するが、とある偶然から手にしたのは聖なる剣。

世界で唯一魔王を殺し得る勇者となった彼の運命は！？

なんとなくArcadiaのチラ裏にも投稿

勇者、聖剣と出会う

十五年前、突如別世界からやってきた魔王は、絶大な力を持ちながら、人類を滅亡させるわけでもなく、世界を破滅に導くわけでもなく、移住を目的としていた。

対価として彼が持ち込んだのは異界の技術、魔法。人類は空想の中にしか存在しなかった力を手に入れたのだ。

最もその恩恵を受けた国は、魔王が住む日本。

中でも魔王城の建つ由久市は、現在“魔法都市”と呼ばれて、世界中の注目を集めている。

由久市に存在する国立魔術大学附属高等学校は、現在世界中で唯一魔法技術の専門教育を行う高等学校である。

今日は書類審査を通過した来年度入学希望者に対して筆記試験を行っていた。

「ああ、くそ。駄目だ、絶対ダメだった！」

そう言って頭をかきながら試験会場となった校舎から出てきたのは、瀬川宗也という少年だった。

「気にすんなって。最初から駄目元なんだから」

「そうだよ。瀬川は書類審査に受かったこと自体奇跡だぜ」

同じ中学に在籍する仲間たちが茶化す。

「喧嘩売ってんのかコラ」

「事実だろ。俺だって自分は書類で落とされんと思ってたし。去年はウチの中学、全員書類落ちだって聞いたよ」

そう言ったのは同じ中学の中で一番学力のある宮野悟。

「宮野でも手ごたえ無し？」

「マジで運がよかつたらつてところかな」

四人がそろつてため息をつく。

「これからどうする？ 俺は観光でもしてこようかなって思ってるんだけど」

悟の質問に答えたのは二人。

「俺は滑り止めの試験対策。家に帰るよ」

「俺もー」

「宗也は？」

少し悩んで答える宗也。

「宮野に付き合うよ。観光に来たこともなかったし」

「わかった。じゃあここから別行動だな」

そう言つて悟と宗也は二人と別れた。

真つ黒。それが魔王城を見た宗也の感想であつた。

「中まで入れるのか」

「一階部分だけ一般開放されてるみたいだな」

パンフレットを見ながら悟が言う。

「警備員とかいないのかよ。階段上がったりする奴いないのか？」

「魔法による完全自動警備システムだそうだ。障壁が展開されてて階段には近づくこともできないらしい」

熱心にパンフレットを読んでいた悟だったが、手の中からパンフレットが滑り落ち、ひらひらとどこかへ飛んでいく。

「おっと、スマン。ちよつと拾ってくる」

「ん、早めにな」

パンフレットが入ってしまった、ドアのない部屋に悟が入ろうとするが。

「あれ？」

「どした？」

「は、入れない？」

パントマイムの様に部屋の入り口部分で止まる悟。

「これが障壁つてやつなのっ、かつ！？」

「だったらパンフレットも入り込まないだろ」

そう言つて宗也がパンフレットを取りに行くと、悟を拒んでいた力が嘘のように消え、転んだ悟が悲鳴を上げる。

「何やってんだよ。ほら、パンフレット拾ったし、行くぞ」

「ああ、なんだったんだ一体……」

悟が謎の現象の正体を確かめようとして、辺りを見回し、硬直する。

「おい、宗也」

「なんだよ」

「俺の視線の先に、何がある？」

言われて悟と同じ方向を見ると、そこには地下に続く階段があった。

「階段だな」

「ああ、この部屋には階段しかない」

悟の言葉通り、この部屋には階段以外何もなかった。

悟がゆっくりと階段に近づく。

「おい、階段には近づくこともできないって、さっきお前が……」
言葉は途切れた。悟が階段を、確かに一歩、降りたから。

「階段を守る障壁は、この部屋の入口にあつたんだ」

「だったらなんで、パンフレットが入って」

「わからない。でも、お前が入ろうとしたら、障壁は消えた」

何かまずいことになるうとしている。そう思った宗也は悟の手を取って部屋から出ようとし、失敗した。

「がつ！？」

見えない障壁に頭をぶつけ、押し戻された宗也。悟も外に向かつて手を伸ばしたが、障壁がそれを阻む。

「俺達はここから出られないみたいだな」

「どうしろつつうんだよ、この状態」

悟が少し考える。

「……俺は下に降りてみようと思う」

「いや、それはマジでやばくないですか？」

「ここでじっとしてるよりかはいいだろ。下に人がいれば、その人に事情を説明して出してもらえばいい」

そう言っつて悟は階段を降り始めた。

「だれかいますように……」

仕方なく、宗也は悟を追いかけた。

宗也の願いは届かず、二人はやけに広い地下室に出てきた。

「誰もいないな」

「おまけに何も無い、か」

悟の言葉に首をかしげる宗也。

「いや、あそこになんかある」

「どこに？」

「どこって、真ん中だよ。部屋の真ん中」

悟は目を細めて、部屋の中央を見る。

「俺には、何も見えない」

「いや、剣、か？ 床に突き刺さってるじゃないか。鎖がじゃらじゃら巻き付いてて」

悟は念を押すように訊く。

「お前には、見えるんだな？」

「……ああ。やっぱりなんかあるとしたら俺の方がよ」

「みたいだな。お前には何かがある」

宗也はは、あつと息を吐き、気合を入れた。

「あの剣、抜いてみる」

「いいのか？」

「進入不可能なはずの場所で、俺にしか見えない剣だぜ。俺がやるしかないだろ」

「……悔しいな。魔王城に隠された武器を見つけたって、絶対なんか選ばれた者っぽいから」

「もしかしたら、魔王の後継者になったりしてな」

軽く笑って、宗也は剣の所にやってきた。

「これで何にもならなかったら、この剣蹴り折ってやる」

宗也はそう言って剣の柄に触れる。

瞬間、目が潰れそうなほどの光が地下室を満たした。

「うわっ！！ ツク！！」

思わず手を放し、腕で顔を覆ったが、それでも暴力的な光が宗也の目を襲う。

「おい！ 悟、大丈夫か！？」

ああ、という返事は帰ってきたが、何故だかさっきまでの距離よりも遠くから聞こえてきたように思える。

そんなことを思った直後、宗也の腕はがしっと掴まれて、とんでもない力で顔から引きはがされた。

驚きで思わず目を見開いたら、光は収まっていて、目の前にはとびつきり綺麗な少女の顔があった。

意志の強さを感じさせる金色の瞳。透き通るような、それでいて輝いて見える肌。髪は内側に炎を宿したかのように輝いていて、整った顔には思わず目を奪われた。

「ふむ、そなたが今代の勇者か。今までの者と違い、凡庸な顔をしているな」

綺麗な紅色の唇が紡いだ言葉は、そんな言葉だった。

「勇者」

宗也の口から滑り落ちた言葉を聞き取り、少女は答えた。

「そうだ。“光の神”ルグナ・ディオ・アレフトの加護を受けし人の子の末裔よ。そなたは世界を滅ぼそうとする闇を切り払い、神の光を掲げる使命を負った勇者だ」

「る、ルグ……？」

少女の言葉を理解出来なかった宗也に、なおも少女は言う。

「我は光の聖剣『アーヴライト』の精霊、フィリアだ。さあ、勇者よ、我を掲げよ。光の神の名のもとに、悪しき魔の王を討ち滅ぼすのだ！」

少女、フィリアは金色の瞳を輝かせ、宗也に手を差し出した。

宗也には何が何だか理解できなかった。

勇者、入学決定

“魔王”ゼオフィス・レディンヴァール。十五年前にこの世界に移住をしてきた異世界の存在であり、人類に魔法をもたらした世界最高の魔導師。

たった一人で世界を滅ぼせる男が、瀬川宗也を見ている。宗也の顔面が蒼白になるには十分過ぎる理由だった。

「ふむ……、聖剣を目覚めさせたのは君で間違いないかね？」

「ッ、ハイ！」

魔王から発せられる威圧感は尋常なものではなく、宗也は反射的にそう答える。正常な思考能力など、かけらも残っていないかった。

「そうか。……二人とも、下がれ」

魔王はそう言つて、宗也を此処につれてきた男たちをちらりと見た。

「しかし陛下！」

「下がれと命じた。……死にたいか？」

魔王の威圧感は急激に増して、宗也の意識を奪いかけた。そのことに気が付いた魔王はため息をついて顎の髭を擦る。

「これ以上乱暴に話を進めたくはないのだよ。彼女を怒らせることは無益だと思わないか？」

そう言つて魔王が視線を向けたのは、宗也の隣に立つ少女、聖剣『アーヴライト』の精霊であるフィリア。

「アーヴライト、一つ訊く」

「下らないことだったら殺すぞ、魔王」

殺気を全く隠さないままに答えるフィリア。宗也は生きた心地がしなかった。

「その二人、お前だけで殺すのに何秒かかる？」

「愚問だ。この程度なら十だろうが一瞬だ」

「……とのことだ。事を荒立てる気がないなら、下がれ」

二人の言葉に戦慄した男たちは、僅かな魔力光を残し、一瞬で消え去った。

「さて、これでゆっくり話ができるな」

魔王は玉座から腰を上げ、ゆっくりと宗也たちのところまで歩いて来る。

「殺し合い、の間違いではないのか」

フィリアは光を剣のように構え、剣呑な空気を纏わせたまま魔王と宗也の間に入る。

「アーヴライト、この国で殺人は禁じられているのだがね？」

「冗談のつもりか、魔王が」

「いやいや、本気だよ。ここ日本ではごくまれな例外を除けば、人を殺すことは禁じられている」

「さて、ニホン？　どこの事を言っている」

構えた光の先端がわずかに下がる。

「この世界に存在する国家の一つだ。フェンデルグのどこでもないよ」

「フェンデルグではない！？　何故神の加護無き土地に勇者が現れるのだ！」

あからさまに狼狽するフィリア。魔王は困ったように首をかしげて答える。

「その辺の事情も訊きたいのだが、どうやら君も答えを持っていないようだ」

さて、と言って魔王は宗也を見る。思わず宗也は気を付けの姿勢を取ってしまった。

「そう固くならなくともよい。たしか、そう……、瀬川宗也君だったか」

「は、はい。え、あ、なんで俺の名前……」

「願書には全て目を通してある。見覚えがあつたので記憶を掘り返したただだよ」

「勇者よ！　魔王に気を使う必要などない！　すぐに契約を交わし、

魔王を」

そこまで言ってフィリアは口を紡ぐ。

「まあ、契約まで済ませているとは元より考えておらんよ」

魔王はそつと人差し指を立てて、闇色の魔力光で魔法陣を空中に描く。

「立ったままで話をするのも疲れるだろう。部屋を用意した。罨がないか存分に確かめてくれ」

そう言って魔王は空間転移した。残された魔法陣を見て、フィリアが呻く。

二、三分そうしてから、フィリアは「罨はないようだ」と吐き捨てた。

フィリアに連れられて宗也は初めて空間転移を体験した。五感の全てが無茶苦茶に掻き混ぜられたようで、できれば二度と体験したくはなかった。

魔王は黒の鎧とマントという、いかにも魔王らしい恰好から、黒のスーツに着替えていた。ニメートル近い隆々とした体躯の割によく似合っている。何をしても傷一つつかない気がするのは、やはり魔王の貫録のせいだろうか。

「さて、二人とも座りたまえ」

そう言って、革張りのソファーに腰かけて、対面に座るように促す。フィリアはふん、と鼻を鳴らして乱暴に腰かけた。宗也も恐る恐る座る。

辺りを眼だけ動かしてみれば、立派な机やらが目に映った。

「魔術大学にある私の部屋だよ。すぐ使える場所はここしかなかったのね」

その言葉で、ようやくここが理事長室であるとわかった。

「さて、瀬川宗也君。君は事態を理解しているかね？」

「……いえ、まったく」

何がどうなっているのかなど、さっぱりわからない。いきなり現れたフィリアという抜群の美少女は宗也を勇者と呼び、宗也の憧れの魔王に対して特大の殺意を向けている。

「無理もない。今から簡単に説明しよう」

詳しく聞きたければ彼女に訊けばいい。そう言っただけ魔王は話し始める。

「フエンドルグ。“無限神”イセオントュールによって創造された世界の名前だ。私と、アーヴライトの出身世界でもある」

ここでは“光の神”ルグナ・ディオ・アレフトなどの神々と、“魔王”が熾烈な争いを繰り広げていた。

魔王は神々や彼らに選ばれた人間、勇者によって幾度となく滅ぼされ、そのたびに新たな魔王が出現。何度も戦いを繰り返した。

「変化があつたのは私が魔王になってからだ。私は勇者を退け、殺害することに成功した」

ガツ、と音を立て、フィリアが立ち上がる。魔王と視線を交わり、納得いかないように座りなおした。

「話を続けよう。その後、私は神々との戦いに勝利した。彼らを殺戮し、世界を支配した」

「馬鹿な、“光の神”を殺したなど！」

「事実だよ、アーヴライト。……誰にとっても不幸なことに」
「不幸？」

宗也の呟きを魔王は聞き逃さなかった。

「ああ、そうだ。神々の滅びは、私にとっても不幸な出来事となった。当時の私は勝利に酔って、そうは思わなかったがね」

「どうということだ」

「神々が滅んだことによって、世界は破綻したんだ。私の配下も次々と滅び、私が全力で張った結界の中に避難した者しか残らなかった」

魔王は天を仰ぎ、ため息をつく。

「結果は徐々に収縮し、私は最後の力を振り絞ってこの世界に避難した。常世界法則に手を伸ばすのがどれほど愚かなことなのか、私は思い知ったよ」

出来る事ならば、過去に戻ってやり直したい。そう魔王はつぶやいた。

「後悔しているよ。私は大罪を犯したのだ。お前達が私を殺すというならば、抵抗はしない。家族の事が心残りではあるがね」

目の前の魔王は、小さく、疲れ切ったように見えた。宗也にはさつきまでと違い、ただの人間にしか見えなかった。

「そうか、ならば今すぐ殺してやろう」

フィリアが立ち上がり、怒りを露わにする。

「契約もしてないのか？」

「ッ、ちっ！」

苛立たしげにフィリアは腰を下ろす。

「そう、契約だ。聖剣と契約した勇者は、私を殺すだけの力を得る。おそらく、この世界で私を殺せる唯一の手段だ」

魔王は宗也を見る。

「瀬川宗也君、君は私を殺せる力を手に入れることが出来る。使い方を誤れば世界を滅ぼす力だ」

宗也は、何も言えなかった。

「私はもう、世界が消える光景は見たくないよ。あれほど恐ろしいものはない」

私と同じ体験はさせたくない。そう言っただけ魔王は、カードを一枚、取り出した。

「……これは？」

「君には、力というものを知ってもらいたい」

カードには宗也の顔写真、学生証の文字。

「四月から、君には国立魔術大学附属高等学校に来てもらう。力を暴走させても、初めの内なら、私が止めることができるからね」

学生証を受け取り、宗也は礼を言う。魔王は苦笑して、

「私がしたいようにしただけだ。礼などいらんよ」

魔王は立ち上がって、窓から外を見る。

「私を殺せるということは、言わない方がいいだろう。君を利用しようとするものが出てくるかもしれん」

宗也たちに背を向けた魔王は、話は終わりだと言った。

「君が正しき怒りをもって私を殺すというなら、私はおとなしく殺されるつもりだよ」

その背中を、宗也はじっと見ていた。

「俺は、あの人を殺したくはないよ」

大学から出ようと歩いている途中で、宗也はフィリアに言った。

「奴の行いは到底許されるものではない。だが……」

フィリアはそこで、何を言うべきか迷い、

「奴が、再び世界に牙を剥くことは、無いように思える」

そう言って、黙ってうつむいてしまった。

勇者、聖剣を手にする

外に出ると、宮野悟が待っていた。

「ああ、良かった。ものすごい光ったと思ったら、いきなり捕ま
って引き離されたから心配したんだぜ」

超有名人と会ったショックで彼の事をすっかり忘れていた宗也は、
謝ることにした。

「お、おう。悪い」

「いや、いいよ。それより結局、何がどうなったのか教えてくれよ」
こっちは何の説明もなかったんだぜ、という悟に、どう答えたも
のか考える。

「そっちの美少女二人についても、詳しく説明してくれよ？」

「うーん、……え？」

たしか自分と一緒に歩いていたのは、聖剣の精霊のフィリアだけ
だったはずだ。そう考え振り返った宗也の目に映ったのは、確かに
二人の少女。

いつの間にか宗也たちと一緒に歩いていた黒髪の少女は、凜と立
ち、にっこり笑った。

「私の名はルシア・レディンヴァール。“魔王”の娘だよ」

よろしく。そう言った少女の眼は、魔王と同じ赤い眼であった。

「うわ、よろしくお願いします！ 俺、宮野悟です」

悟と握手する少女、ルシア・レディンヴァール。

宗也の脳裏にルシアについて知る情報が浮かぶ。

魔王の一人娘。魔王に次ぐ魔力の持ち主。同じ中学三年生。

「うわ、みんなに自慢できるぜ。なあ宗也」

舞い上がった悟を見て、ルシアが苦笑する。

「そう浮かれる事でもないだろう。君も魔術高校に入れば、毎日
も会えるだろうし」

「いや、魔術高校に受かること自体、奇跡的ですって」

そう言言った後で、何かに引っかけたらしい悟は宗也を見る。

「君、も？」

そこでルシアは、これはまだ秘密なのだが、と前置きをする。

「宗也君は特例で魔術高校に入学が決まったんだよ」

数秒の後、悟の絶叫が大学の敷地に響き渡った。

「つまり、あれですか。コイツには桁違いの才能があるから、今のうちに確保しよう」と

「まあ、そう思ってくれてかまわないよ」

ルシアの説明で悟は納得したように頷いた。

「別世界の伝説の剣かー。まさしく選ばれし者って感じだな」

あー、羨ましい。とぼやく悟。

「そうかね？ 現代社会では使い道などないと思うのだが」

「男の夢みたいなものですよ。異世界に召喚されて悪しき魔王を倒すみたいなのは。あ、ルシアさんのお父さんは素晴らしい方ですよ」

悪しき魔王。その言葉に宗也とフィリアはわずかに反応する。

“魔王”ゼオフィスは、前の世界では『悪しき魔王』だった。恐らく本人はそう思っていると、先ほど見た罪人の様に頂垂れた姿から宗也は考える。

「そう言ってくれるとありがたい。自慢の父だ」

ルシアは何の躊躇いもなくそう言った。彼女は父親の後悔を知らないのだろうか、宗也は疑問に思う。

「なあ宗也、剣見せてくれよ。フィリアちゃんがそうなんだろう？」

「お、おう？」

そう言われても、宗也はあの剣がどこにあるのかよくわかっていない。困ってフィリアの方を見た。

「……『アーヴライト』は、私の実体化の際にエーテルを収束させる核となる」

説明したつもりなのだろうが、余計にわからない。ルシアが説明を引き継ぐ。

「エーテルは、要するに魔力を注ぎ込むと実体化する物質だ。まあ、今はフィリアさんの体の中に剣があるという事だよ」

「なるほど。じゃあフィリアが実体化というのをやめれば剣が出てくるのか」

宗也の言葉に、フィリアが頷く。そして宗也の方に手を伸ばしてきた。何のつもりだろうか。

「手を握れ。私を地面に落とすつもりか？」

「あ、いや。そう言うわけじゃない」

あわててフィリアの手を握る。フィリアの小さな手は柔らかくて温かく、宗也の心臓は鼓動を速めた。

「解くぞ」

フィリアがそう言った直後、彼女の体が白い光になって消える。

代わりに宗也の手の中に聖剣『アーヴライト』が現れた。

「ほう、綺麗なものだな」

ルシアの感想に、宗也もああ、と肯く。輝く剣は美しく、刀身の中央に入った二本のラインは、フィリアの髪と同じ色をしていた。

羽根のように軽い訳でもなく、持ち上げるのが大変なほど重い訳でもない。実用的な、振れば人を殺せる重さ。

「不思議な位俺の手になじむのは、やっぱり俺が選ばれたから、かな」

「歴代の勇者たちも、同じようなことを言っていたな」

刀身からフィリアの声が響く。悟はフィリアの言葉を聞いて、首をかしげる。

「勇者、というと魔王と敵対とかしてた訳？」

「かつてはそうだった。……今は、良く、わからぬ」

フィリアの呟きからは、困惑が伝わってきた。

「あの魔王様と敵対か……。想像できないな」

「私としては仲良くやってくれとありがたいのだがな」

悟とルシアの言葉を聞いても、フィリアは何も言わなかった。

勇者、親の説得方法を考える

「ああ、言うのを忘れるところだった」

ルシアがそう言ったのは、宗也が由久駅に入ろうとするときだった。

「なんですか？」

「敬語は使わなくてもいいよ。四月からは同じ学校の生徒だからね。もつとも、私はまだ入学が決まっていらないが。そう笑ってから、ルシアは真剣な顔で宗也に向き直る。

「宗也君。君はまだ、魔法を使おうとしてはいけない」

「え、いや。そもそも俺はまだ」

「使い方を知らない？ 今から教えるよ」

教えるが、使つてはいけないとは、どういうことだ？ と宗也は困惑する。

「魔法の使い方はいたって単純。強く願う。あるいは強く思う、強く信じる。それが魔法の基本だ」

「そりやまた、ずいぶんと」

「簡単に聞こえるだろう？ だが、普通の人間ではそれだけでは足りない。故に様々な工夫を施すのだが」

君は普通ではない。ルシアはそう言い切る。

「君の潜在能力は、無自覚に聖剣の封印を解くほどだ。おそらく途方もなく高い。聖剣と共に在れば、すぐにその力は目覚めるだろう。目覚めた力が精神に引つ張られたら、容易く暴発する。だから入学までは待つてくれ」

そう言つて、ルシアは一度苦笑する。

「私も色々騒動を起こして、父の手を焼かせたものだ。経験者からの忠告だよ。そもそもこれを言うために君のところに来たんだ」

「ああ、ありがとう。……で、いいのかな？」

「うん。じゃあ、また会おう」

ルシアは踵を返して、颯爽と去って行った。

切符を買おうとした時点で、宗也はある事実が付いた。

「そういえば、フィリアはどうしよう」

「私は勇者と共に在るぞ」

「……たぶんそんな感じの事を言うと思ったよ」

恐らく、一つ屋根の下で暮らすことになるだろう。どうやって両親を説得するか悩む宗也に悟がつぶやく。

「美少女と同棲か」

「バツ、馬鹿野郎！ 親もいるんだから、居候ができるだけだ！」

「女に飢えた奴らに知られないよう気をつけるよ」

「……努力する」

「魔術高校は全寮制で、二人一部屋だったな」

男たちの妬みが恐ろしい事になりそうだと笑う悟を視界から出して、ルシアの忠告を無視するべきか、さっそく検討に入る宗也であった。

結果から言えば、何の説明もいらなかった。

「お母さんうれしいわ。可愛い娘、欲しかったもの」

「魔術学校なら国立だ。学費が安いから、フィリアちゃんの生活費も貯金で何とかなるさ」

何とも楽天的だ、詐欺とか大丈夫なのだろうか。悩む宗也を無視して瀬川夫妻はフィリアの世話を焼きはじめる。

日本の生活などしたことがないフィリアの世話は、二人にとっていい刺激になったらしい。ますます可愛がる。

夕食を作っている最中、チャイムが鳴った。宗君お願い、といっ

た母に答え、玄関に行ったら段ボール箱を持った配達員がいた。

差出人はゼオフィス・レディンヴァール。中には手紙と、フィリアの魔術高校の学生証と、中学の女子制服とかが入っていた。

「『戸籍等は何とかしたので、彼女を学校生活に慣れさせてくれ』って、仕事速すぎだよ魔王さま」

中途半端な時期だが、フィリアも明日から中学生らしい。宗也は明日、クラスメイトにどう説明するかを悩む事になった。

「此方では家の中に浴場があるとは、便利な世界だな」

フィリアはバスタオルでわしわしと髪を拭きながら宗也の所に来た。

「フエンブルグ、だっけ？ あっちだとどうだったんだ？」

「フエンデルグだ。向こうは公衆浴場だけだな」

尤も、先代の勇者がいた時代の話だが、とフィリアが言う。髪が上手く拭けないらしく、タオルを前に持ってきて、軽くにらむ。

「ふーん、……なあ、勇者って呼ぶのはやめてくれないか？」

宗也がそういうのと同じく、フィリアの髪が一瞬、炎を噴き出す。

どうやら髪を乾かしたようではあったが、熱は感じられず、髪も炎を秘めた様な緋色のままだった。

「なぜだ？」

「勇者って言われるといろいろ説明がややこしいし、……何より、倒すべき相手が最初から居ないし」

宗也の言葉に、フィリアは少し考え、

「わかった、宗也」

そう、答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0733z/>

何故か勇者

2011年12月5日09時55分発行